

三つの宝とは何か。

第1は練習または練習の体験——不可能を可能にするものは練習だという体験——を持つことである。

人類の歴史は見ようによっては、不可能を可能にする過程の連続である。それは、一つは発明によって、一つは練習によって行われる。(中略)

他面、我々人類は無数の不可能を練習によって可能にしつつある。早い話が水泳である。水泳を知らないものは、水に落ちれば、溺れて死ぬ。水泳を知るものは、容易く浮かぶ。水に落ちて死ぬものと、浮かんで生きるものとは、別種類の動物だといっても好いくらいの違いである。幼児が水に落ちたのを目前に見て、黙って見ていなければならぬ人間と、飛び込んで助け得る人間とでは、道徳的に別種類の人類だといわねばなるまい。そうしてそれは、練習するか、しないかによって岐れる。

これは一例に過ぎぬ。他の無数の場合に練習は不可能を可能にするのである。10メートルの高さから水に飛び込むことは、練習しなければ、いかなる勇士も敢えてしない。また練習しなければ100メートルを十五秒で走ることさえも不可能であろう。さらにあの機械体操で、ほとんど重力というものを無視したかと思われる様々の人体の動きや姿勢は、練習ということ度を外しては、ほとんど思いもよらぬことであろう。

あれらこれら無数の場合において、無数の不可能を可能にするものは、説明でなく、説教でなく、ただ黙々として続けられる練習これのみである。(中略)

第2の宝は何か。フェアプレーの精神だと私はいいたい。

フェアプレーとは何か。それは正しく、いさぎよく、礼節をもって勝負することである。反面からいえば、不正をにくみ、卑怯をにくみ、無礼をにくむ精神である。この精神は無論誰もが抱くものであるが、勝負を争う競技の間に最も痛切に体験され、養われる。

Be a hard fighter and a good loser. (果敢なる闘士で、そしていさぎよく敗者であれ)、果敢なる闘士であればあるほど、そのいさぎよく敗者であることの意味は深い。フェアプレーという言葉は英語であるが、その精神は、直ちに日本人の心に訴える。「尋常の勝負」といって、「負けっぶり」が好いとか悪いとかいう言葉をもつ日本人は、本来フェアプレーということをもっとたっとく国民ではないのか。(中略)

第3は何か。私は友だといいたい。友は人生の宝である。わが信ずる友、われを信じてくれる友、何でも語ることのできる友、何をいっても誤解しない友、これを持ち得たものは、人生の最も大きい幸福を得たものというべきである。もしもついにそれを持ち得なかったとすれば、そのような人生は貧しい、寂しい一生であつたといわなければならぬ。我々の友に種々様々の人があるように、我々が友を得る縁と機会もまた種々様々である。同窓の友がある。商売取引の間に得た友もある。たまたま船や車に同乗した機会に終生の友を見いだすということも、決してないとはいわれない。しかし、スポーツによって得た友が、利害の打算を全くはなれた、一種特別のものであるということは、体験あるもののひとしく認めるところであろうと思う。同じチームで練習の労苦をともにした友、共に試合に出場した、いわば戦友ともいうべき友、更に敵味方となつて勝負を争った、その相手、この人々との交りはこれは格別のものである。

友は、或る意味で日光に比すべきものであろう。それは日の光と同じく、我々の心をあたため、我々の心にあるよきものを育てる。向日葵は太陽に向かって咲くという。それは向日葵には限らない。すべての花、すべての葉は、日の光を得て咲き、しげる。同じように、我々の心にあるよきものは、友を得て、咲き、またしげるということができる。

もしもスポーツがそのような友を人に与えるとすれば、これを第三の宝として挙げることに、誰も異存はあり得ないと信ずる。